

見返り阿弥陀

1082年、永観堂の阿弥陀堂で、2月15日の夜明け前の薄暗い時間に奇跡が起きた。それは永観律師（1033～1111）が「南無阿弥陀仏」を唱えながら、阿弥陀様を周回する日課の念佛行道に一生懸命取り組んでいた。永観は、念佛と呼ばれるこの修行を熱心に行うことによって、悟りが容易に開け、阿弥陀様の西方極楽浄土に生まれ変わることができると思っていた。永観は念仏を毎日6万回熱心に唱えたことが記録されている。

阿弥陀仏の周りを行道しているとき、永観はその場で彼を凍りつかせた何かを見た。木造の阿弥陀様は須弥壇から優雅に降りられ、まるで極楽浄土にお導きになるように彼の前を歩き始められた。永観が呆然としていると、阿弥陀様は一瞬立ち止まれ、左肩越しに振り返られ、永観が立ちつくしている様子をご覧になった。そして、

「永観、おそし」と阿弥陀様はおっしゃったのである。

永観は阿弥陀様が浄土に向かって前進することを奨励しているこのお姿に非常に触発され、同じお姿の阿弥陀像に作り直し多くの人々を励まそうとしたと信じられている。「みかえり阿弥陀」はそれ以来、永観堂にいらっしゃる。数百年後この像は広く有名になった。江戸時代中期（1603～1867）には、京の有名な場所を紹介した多くの指南書（名所案内記）にも取り上げられた。これらの指南書は、詩と木版画の鮮やかな挿絵を通して、京を活気づけた。当時の人々は、快適な我が家を離れることなく旅行の楽しみを体験できる安価な方法として、その指南書が大阪と江戸（現在の東京）で広く販売された。

「みかえり阿弥陀」は、これらの指南書を通じて非常に有名になり、阿弥陀像も一般公開されるために大阪と江戸に持ち込まれた。これらの公開勧進を通じて、永観堂の維持のために重要な資金が調達され、同時に寺院に関する知識も全国に広まった。

「みかえり阿弥陀」の人気は、この像が浄土宗の本質と、慈悲（サンスクリット語の「カルナー」）あるいは深い思いやりの概念を正確に伝えていたからであろう。像のお姿は、阿弥陀様が辛抱強く救済に導き、私たちが正しく解脱へ進む力をお与えになるのと同時に、私たちの心の思いやりを鼓舞するお姿を示している。阿弥陀像は無限の慈悲と深い思いやりを伝えている。阿弥陀様はたゆまぬ努力で、全ての生き物を苦しみから解放し、彼らが浄土で悟りが得られるように導いておられるのである。

伝説によると、阿弥陀像は当初、永観が背負って永観堂に持ち込まれたと言われている。それは、永観が国の認定した律師になったことを賞した白河天皇(1053–1129)からの贈り物であった。永観に下賜されるまで、この像は奈良の東大寺に保管されていた。東大寺の僧たちは永観に像を返すように説得したが、像は永観の背中に取りついて離れなかった。今日、「みかえり阿弥陀様」は永観堂に祀られている最も有名な宝物である。